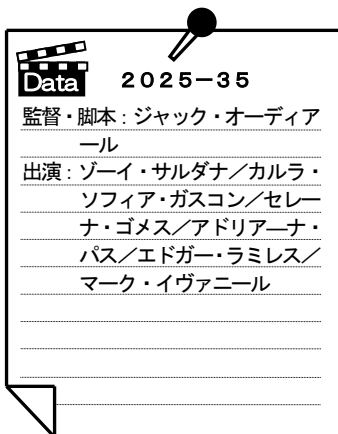




みどころ

男から女への性転換手術を望む者が稀なら、メキシコの麻薬王も 1 人だけ。しかも、新たに生まれ変わった女は巨大慈善団体の女王に！そんな世にも稀な物語を、ミュージカル・エンターテインメントに仕立てたのが本作だ。したがって、アカデミー賞大本命！は当然だが、結果は意外にも・・・。

弁護士歴 50 年を迎えた私には、本作で麻薬王マニタスと、新しく生まれ変わった女性エミリア・ペレスという両者からの、とんでもない依頼を誠実に処理する女性弁護士の奮闘が興味深い。弁護士と依頼主との信頼関係のあり方を考えるうえでの絶好の教材だから、是非その視点からの検討も！

第 97 回アカデミー賞で、エミリア・ペレス役を演じたトランスジェンダー女優が主演女優賞をゲットできなかったのは残念だが、弁護士役の女優の助演女優賞の受賞に拍手！また、カンヌでは 4 人の女優たちがまとめて助演女優賞を受賞した快挙にも拍手！

あっと驚くハチャメチャな物語の面白さが格別なら、ロンドン発やハリウッド発の名作ミュージカルとは異質のオペラ風エンターテインメントもしっかり楽しみたい。それにしても、なぜ、本作はアカデミー賞作品賞、監督賞を受賞できなかったの？

■□■アカデミー賞大本命の本作は何の映画？タイトルは？■□■

私は本作を日本公開直後の 3 月 31 日に鑑賞したが、そのチラシは年明け早々に受け取っていた。そのトップには「本年度アカデミー賞大本命！」「作品賞含む最多 12 部門 13 ノミネート！」の文字が躍っている他、「第 77 回カンヌ国際映画祭女優賞（アンサンブル受賞）審査員賞 W 受賞」「第 82 回ゴールデングローブ賞 最多 4 部門受賞」とも書かれている。

しかし、「エミリア・ペレス」とは一体何？そして、本作は何の映画？

チラシには、「魂を撃ち抜く、全く新しいミュージカル・エンターテインメント」「最恐の麻薬王だった彼女・女たちの出会いが運命を切り開く」の文字が躍っているが、それって一体何？また、チラシのストーリーの欄を読むと次のとおり書かれている。すなわち、

メキシコの麻薬王マニタスから「女性としての新たな人生を用意してほしい」という極秘の依頼を受けた弁護士のリタ。完璧な計画により、マニタスは姿を消すことに成功するも、数年後、イギリスに移住し新生活を送っていたリタの前に現れたのは、新しい存在として生きるエミリア・ペレスだった。過去と現在、罪と救済、愛と憎しみが交錯する中、運命は思わぬ方向へと大きく動き出す。

なるほど、なるほど。すると、「新しい存在として生きるエミリア・ペレス」とは、昔メキシコの麻薬王だったマニタスと同一人物！？そう考えざるを得ないが、それって・・・？

そんなストーリーならかなり恐そうだが、なぜそんな映画が“ミュージカル・エンターテインメント”なの？

■□■フランス人監督がなぜメキシコを舞台に？オペラ風に？■□■

本作はメキシコシティで働くメキシコ人の女性弁護士リタ（ゾーイ・サルダナ）が、メキシコの麻薬王マニタス（カルラ・ソフィア・ガスコン）に呼び出されるところから本格的なストーリーが始まっていく。したがって、中盤には“ある事情”のために舞台がイギリスに移るものの、基本的な舞台は前半も後半もメキシコだ。

他方、『ディーパンの闘い』（15年）（『シネマ 37』126頁）、『ゴールデン・リバー』（18年）（『シネマ 45』112頁）で有名なジャック・オーディアール監督は1952年生まれのパフランス人監督だ。本作のパンフレットにある監督のINTERVIEWによると、ジャック・オーディアール監督が本作のアイデアを思いついたのは、ボリス・ラズンの『Écoute』という小説を読んだことだが、他方で、オペラをやってみたいと考えたそう。その上で、主人公がタミル語を話す『ディーパンの闘い』や全編英語で撮影された『ゴールデン・リバー』に続き、メキシコを舞台に全編外国語で制作しようと思いついたが、その理由は、「フランス語だと文法や単語の選び方、句読点など、ほとんど意味がないような細部に注目しがちです。代わりに、あまり得意ではない、あるいはほとんど話せない言語で制作を行うとき、映画のセリフと私とのつながりは完全に音楽的なものになるのです。スペイン語でオペラを書くことにより非常に力強く、豊かな身体表現と共に強いアクセントから抑揚も生まれます。」と説明されているので、なるほど、なるほど。

私は中学・高校時代に『ウエスト・サイド物語』（61年）、『マイ・フェア・レディ』（64年）、『サウンド・オブ・ミュージック』（65年）等を観た時から“ミュージカル大好き人間”になっているからミュージカル映画にはかなり詳しいが、本作はそんなロンドンやハリウッド発の本格的なミュージカルとは全く異質なものだから、それに注目！その最大の違いは、一つずつの名曲をたっぷり聴かせるというミュージカルの王道ではなく、曲が会

話の中に取り込まれていることだ。そんな本作をチラシの見出しのとおり、“ミュージカル・エンターテインメント”と呼ぶのは私には大きな違和感がある。正確には、本文中にある「誰も観たことのない異色のミュージカル・エンターテインメント」がピッタリの表現だ。

■□■カンヌの評価 VS アカデミー賞の評価の違いに注目！■□■

トランプ政権の始動に伴って、ウクライナの和平交渉を巡る米国と西欧諸国との“亀裂”の広がりが心配だが、第97回アカデミー賞ではハリウッド産以上にヨーロッパ発の映画が注目されたのが大きな特徴とされている。その典型が、フランス人監督によるメキシコを舞台とした本作が、アカデミー賞で作品賞、監督賞、主演女優賞、助演女優賞、脚色賞等の他、音響賞、作曲賞、歌曲賞等の最多12部門13ノミネートされたことだ。第82回ゴールデングローブ賞でも最多4部門受賞だから、すごい。

さらにすごいのは、第97回アカデミー賞に先立つ第77回カンヌ国際映画祭で、本作は審査員賞のほか、異例の4人の女優全員がアンサンブル受賞したことだ。もっとも、トランプ政権がウクライナの停戦を巡って容易にドイツ、フランス等の西欧有力諸国と同調しないのと同じように、映画賞の世界でも結局、アメリカ（ハリウッド）は作品賞、主演女優賞等の主要5部門を（アメリカ映画の）『アノーラ』（24年）に決定したから、アレレ、アレレ。他の有力候補との対比はともかく、少なくとも私が本作と『アノーラ』を対比すれば、当然、作品賞、監督賞、主演女優賞、助演女優賞等は（アメリカ映画の）『アノーラ』ではなく、（フランス映画の）本作だと考えている。

本作のアカデミー賞の受賞が助演女優賞と歌曲賞の2つにとどまったのは、ひょっとしてトランプ大統領がメキシコを嫌っているため？そんなバカなことはあり得ないだろうが、本作を鑑賞するについては、メキシコという国の治安の悪さや貧富の格差、その中ではびこるマフィアの実態等々、ジャック・オーディアール監督が本作で描いたメキシコの“負の側面”をしっかりと考える必要がある。

■□■弁護士と依頼主の依頼関係のあり方に注目！■□■

弁護士生活50周年を迎えた私が痛感するのは、第1に弁護士は素晴らしい仕事であること、第2に私が25歳で弁護士の仕事に就いたのは天職だと感謝していることだが、同時に痛感するのは、弁護士業とは何とも因果な仕事（商売）ということだ。その原因は、何よりも人間というものが何とも因果な生き物であるためだ。

私は弁護士登録直後から、良き事務所、良き恩師、良き先輩、良き事務スタッフに恵まれながら日々充実した弁護士生活を送ったが、本作導入部に見るリタ弁護士はその逆で、その能力をボスに利用され、心をすり減らす毎日を送っていたらしい。そのため、彼女は明らかに罪を犯した男たちが、金の力で裁判を動かし、無罪放免される現実日々怒りを募らせていた。

そんなリタにある日、拉致される形ながらも、メキシコ全土を恐怖に陥れる麻薬カルテ

ルの冷酷なリーダー、マニタスから驚くべき依頼が舞い込んだからビックリ。それは、莫大な謝礼と引き換えに「女性としての新たな人生を極秘に用意してほしい」というもの。そのため、誰にも知られない土地で足がつかない腕利きの医者を探してくれと頼まれたリタは、テルアビブで名医のワッセルマン（マーク・イヴァニール）を見つけたが、さあリタはどうするの？本作については、まずそんな、弁護士と依頼主との依頼関係のあり方に注目！

■□■マニタス死去す！残された妻子は？リタ弁護士は？■□■

日本の暴力団では「任侠道」を掲げる山口組が有名だったが、近時は新宿歌舞伎町を中心としたマフィアまがいの暴力団が席卷しているらしい。マフィアといえば、『ゴッドファーザー』3部作（72年～90年）で描かれたイタリアのマフィアが有名だが、今では東南アジア系のマフィアやメキシコのマフィアも幅を利かせているらしい。

本作導入部に見る、メキシコの麻薬カルテルの冷酷なリーダー、マニタスの恐さはあなた自身の目で確認してもらいたいが、そんな男の兼ねてからの願望が「女性になりたい」だったとは、いやはや……。性転換手術といえば、日本ではカルーセル麻紀やはるな愛などが有名だが、実はマニタス役とエミリア・ペレス役の両者を演じたカルラ・ソフィア・ガスコンは、2016年にトランスジェンダー女性（女優？）であることを公表し、2018年に性別適合手術を受けた女優（？）と知ってビックリ！

私は性転換手術の内容については何も知らないが、その大変さは容易に推測できる。他方、麻薬王といえどもマニタスは、家庭内では美しい妻ジェシー（セレーナ・ゴメス）と2人の幼い子供を愛する優しいパパだったらしい。したがって、そんなマニタスが敵対する麻薬組織の手によって殺害されたというニュースが流れると……。

もっとも、その前にリタ弁護士は「安全のために」とジェシーを説得し、母子をスイスのローザンヌに用意した新しい住居に送り届けていたからすごい。つまり、「マニタス死去す！」のニュースは、妻子を安全な場所に移動したことを受けて、マニタスから「任務完了」の電話をもらったリタが、マスコミに流したフェイクニュースだったわけだ。なるほど、なるほど、さすがリタはマニタスが見込んだ有能な弁護士だったわけだ。

■□■あれから4年！ロンドンで再会！新たな依頼は？■□■

本作のチラシの表は3人の女性の上半身を写したものだが、これは誰？左側の一人がリタ弁護士、右側の一人がマニタスの妻ジェシーであることはすぐにわかるが、真ん中の少し太めの女性はい体ダレ？

本作中盤は舞台がロンドンに移り、ゴージャスなドレスに身を包んだ弁護士のリタがある食事会に出席していたから、変われば変わるものだ。もっとも、ロンドンの高級なレストランに、リタのようなメキシコ系の女性は珍しいようだ。そのため、一人の男性を挟んだ席の女性とメキシコなまりの話題で盛り上がったリタが、この女性が誰であるかを知る

と・・・？この面会（再会）は偶然なの？それとも、かつての麻薬王マニタスが仕組んだことなの？

それはともかく、そこでリタは新しい存在として生きている女性エミリア・ペレス（カルラ・ソフィア・ガスコン）から新たな依頼を受けることになったから、アレレ、アレレ……。それは、「恋しくてたまらない2人の子供たちを再びメキシコに連れ戻してもらいたい」という依頼だ。そこでリタは、エミリアは亡くなったマニタスのいとこという設定とし、2人の子供たちを隠れ家にしていたメキシコのローザンヌからメキシコの豪邸に迎え入れることにしたが、そんな、降って湧いたような設定がまかり通ることに、観客はもとよりジェシーや子どもたちが戸惑ったのは当然だ。しかも、メキシコでの新しい生活の中で2人の子どもたちに対するエミリアの愛情表現は度が過ぎていたから、ジェシーがそれに眉をひそめ、女同士の反発を強めていったのも当然だ。

そんな対立をうまく調整し、争いの芽を鎮めていくのはエミリアからの依頼を受けた有能な弁護士リタの役目だが、それは難しい大仕事だ。さらに、そこで発生した新たな問題は、4年前に夫マニタスを失ったジェシーが、昔の男グスタボ・ブルン（エドガー・ラミレス）とヨリを戻そうとしていたこと。そんな2人の関係が徐々に“公然化”してくると、エミリア（＝かつての夫マニタス）のジェシーに対する怒りの気持ちは？

■□■麻薬王から巨大慈善団体の女王へ、大変身！■□■

133分の本作に詰め込まれた物語はメチャ多いうえ、そのそれぞれがあつと驚くハチャメチャで奇想天外なものばかりだから、本作はメチャ面白い。とりわけ、かつての麻薬王だったマニタスが性転換手術を受けて新たな女性エミリア・ペレスに生まれ変わったうえ、再度メキシコの地で妻子と暮らす後半からのストーリーは面白いが、同時に大きなリスクをはらんでいることは明らかだ。

そんな状況下、“あるきっかけ”で、エミリアは麻薬王から“ラ・ルセシタ（小さな光）”という慈善団体の女王へと変身を遂げていくので、それに注目！メキシコでは犯罪に巻き込まれて行方不明になる男女が何万人もいたが、そんな闇の世界（の犯罪）を仕切っていた人物の一人が麻薬王のマニタスだった。それなのに、マニタスの女性としての生まれ変わりであるエミリア・ペレスが、なぜそんな大変身を？“ラ・ルセシタ”の活動は行方不明者の捜索活動がメインだが、生きている行方不明者を発見することは稀で、そのほとんどが遺体の発見だった。しかし、それでも“ラ・ルセシタ”の活動が残された遺族の心の安らぎに大きく寄与し、感謝されたのは当然だ。そんな慈善団体“ラ・ルセシタ”の女王としての活動が続くエミリアと、そのナンバー2として実務を取り仕切っているリタ弁護士の、心のありようは如何に？本作後半では、そこに注目したい。

このように、リタの協力の下にスタートさせた“ラ・ルセシタ（小さな光）”はどんどん大

きくなっていったが、そこで新しく登場するのが、カンヌ国際映画祭で4人まとめて女優女優賞を受賞したうちの1人であるアドリアーナ・パスが演ずる女性、エピファニアだ。エピファニアは夫のDVに苦しむ中で、“ラ・ルセシタ（小さな光）”に救いを求めに来た女性だが、エミリアはエピファニアの救助活動が続いている中で、彼女に恋心を抱いていたから、アレレ、アレレ……。私にはエミリアのそんな気持ちは全くわからないが、これは彼女にとって公私ともにやっと見つけた生き甲斐らしいから、何と何と……。

■□■ジェシーの再婚話から大混乱へ！さあ、どんな結末に？■□■

本作は、あっと驚く波乱万丈の物語が続いていくが、ある日、エミリアに対してジェシーが、グスタボと再婚しメキシコの豪邸を出ていくと宣言したところから、本作は最後の大波乱へ向かっていくことに。エミリアはマニタスのいとこという設定だから、ジェシーの再婚話に口出しする権利などないことは明らかだが、エミリア・ペレスの頭の中や心の中には、かつての麻薬王マニタスとしての悪知恵と実行力がなお健在していたらしい。そこでエミリアが取った手はジェシーの銀行口座の凍結だが、そんな強硬手段を取れば、ジェシーだって対抗してくるのでは？しかして、それが何とエミリアの拉致監禁だったからすごい。そんな事態を知ったリタ弁護士は直ちに必要な措置を取ったが、コトここに至れば収拾不可能……？

さあ、いかにもメキシコを舞台とした映画らしい(?)、そんなハチャメチャな大波乱になっていく本作は、どんな結末に？こりや必見！こりやメチャ面白い！なぜ、本作が第97回アカデミー賞の助演女優賞と歌曲賞のみで、作品賞、監督賞、主演女優賞等選ばれなかったの？私には、それが納得できないが……。

■□■パンフのINTERVIEW、COLUMN、REVIEWは必読！■□■

本作のパンフレットには、INTERVIEWとして、①リタ役のゾーイ・サルダナ ②エミリア／マニタス役のカルラ・ソフィア・ガスコン ③ジェシー役のセレーナ・ゴメス ④監督・脚本のジャック・オーディアール ⑤音楽のクレモン・デュコル×カミーユ ⑥振付のダミアン・ジャレ のものがある。

また、COLUMNとして、星野概念氏（精神科医など）の「アイデンティティと葛藤」があり、REVIEWとして、①鬼塚大輔氏（映画評論家）の「オーディアールが描くのは『帰るべき場所』を探す迷い人たち」 ②村尾泰郎氏（映画／音楽評論家）の「現実と闘うためのミュージカル」がある。「魂を撃ち抜く、全く新しいミュージカル・エンターテインメント」たる本作をしっかりと理解するためには、これらは必読！

2025（令和7）年4月3日記